

---

# おれが魔族の嫁に！？

aslvent

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

おれが魔族の嫁に！？

### 【Zコード】

Z0814P

### 【作者名】

assivent

### 【あらすじ】

ある日、重傷を負った魔法使いの涼は魔族の男に命を救われ、魔界に連れて行かれてしまう、そこで「この人質の人間どもを助けなければ嫁になれ」と脅迫され、抵抗するも・・・。  
「おれはおこだー」「そんなことは関係ないー」

まさかの新婚生活の始まりである。

## 登場人物紹介とか（前書き）

ネタばれ含みますので、プロローグに進むことをお勧めします。  
いや、むしろ見ていくし…という方はどうぞ」覗ください。

## 登場人物紹介とか

### 【登場人物】

／如月涼／

本作の主人公。身長165cmと小柄でクリつとした目が特徴だが、細く端正な顔立ちに意外としつかりとした肩幅のため、初見でもなんとか男として認識されている。

能力：『白銀の舞姫』

能力を使うには、全身白を基調とした巫女服に、蒼のラインをいくつか入れた衣装に変身する必要がある。

同時に性別が女の子になり、身長150cmの子供っぽいかわいらしい顔つきに少女になってしまつ。

巫女服にはたいていの攻撃は反射・吸収する機能付き。物を具現化させて特殊な能力を付与する能力を持ち、剣などを創り出しての近接戦闘などを主としている。

／バストマ・クレル／

涼を連れてきて自らの嫁になるように言つた横暴な男。魔界のラヂオスオン国青蛇軍將軍の地位に就いている。190cmはあるかという長身に切れ長の紫色の瞳、短い赤髪を軽く遊ばせ、西洋の世界から抜け出してきたような印象を持つ。

能力：薄紫色のオーロラ状の魔法を扱う。

涼の行動を制限している腕輪もクレルの魔法。



## 登場人物紹介とか（後書き）

人物・能力・機能など新しく出てきたら随時更新していきます。

## プロローグ（前書き）

初投稿の作品ですのでどうか温かく丁寧で見守ってやってください。

## プロローグ

「人間界を滅ぼせ」

その一言であった。

魔界と呼ばれるこの人間界とは違う世界の一国の王が、ある日突然にそう言った。

それだけで私たちの平和な人間界は、毎日が死と隣り合わせの生きることになった。

その宣言がなされた2時間後、地球の各地に高さ500mはある生物のような黒く、禍々しい巨塔が累計20本出現。

その塔より夥しい数の魔族・魔物があふれ出てきて、あつという間に世界を蹂躪し始めた。

この人間界は魔法や魔法使いといったものは存在はするものの、その存在は一般的には認知されておらず、魔法や魔界、魔族といった情報を全く持たない大半の世界の人々は、なにが起きたのか理解できず、ただ殺戮されていった。

実際は某アメ力軍とか、某ヨーツバの方々が軍隊を出撃させて、撃退することもあつたが、空母や艦隊には魔法に対する防御がなく、一撃食らえばアウトという苦戦を強いられていたため、戦況は芳しくなかつた。

そんな戦いが10日続き、世界の人口が2割（約13億人）減り、某アメ力のリーダーが「カクウチマース」と言い放ち、明日にでも核兵器が投入されるかという時に魔法使いたちは現れた。



## 第1話「魔族と魔法使いと自分」（前書き）

せっかく書いた文章が保存前に消滅しました。  
とっても泣きそうになつて立ち直るのに時間がかかりました。

## 第1話「魔族と魔法使いと自分」

「本日、日本時間6時50分にノルウェー海に存在していた魔族の塔を魔法使いと連合艦隊が破壊したとの情報が入りました。この戦いに参加した魔法使いは・・・・・」

今は朝の7時半、俺・母・父（姉もいるが早々に家を出ている、大學が遠いらしい）で朝食を食べていると、リーンリーンだかボーンボーンだか高い音が鳴り、臨時ニュースというのが流れ始めた。

大塚さんが消えてしまった、まだ小倉さんに代わるのは早いというのに。

そんなことより、そのニュースを見ていた両親は驚いて感心したようだが、すぐに朝ご飯に戻る、あまり興味が無さげである。

確かノルウェー海ってイギリスの上のほうだっけ？

日本からは遠いけどさ、魔族の拠点の一つが潰れたんだから喜びよう、俺の親！

けど俺も人のことは言えないんだけどね、あまり関係ないし、日本は遠いから。

とか考えるあたりはさすが日本人つて感じだね、自分に関係なれば我関せずの精神です。

そのあとは大塚さんが戻ってくることはなく、臨時ニュースが流れ

続けていろいろうちに登校時間になり家を出た。

「いつてきま～す」

「ここで現状確認、世界やばいんじゃない？」

「という状態でなぜこんなのんびりとしているの？  
とか・・・。」

「お前誰？」

「とか・・・。」

「疑問があると思うので順に説明させていただこう。」

「まず世界に現れた黒いキモイ塔は魔族の拠点であり、そこからうようと魔族や魔物が出てくる。」

魔族とは見た目は全く人間と同じだが保有する魔力量やら、身体の構造なんかが人間とは違うが、ぱっと見は見分けがつかない。魔物を従える力を持つていて、人間を滅ぼそうとする。

そして、魔物とは魔族が使役している動物みたいなやつら、でかいのから小さいの、キモイのからお持ち帰り、したいのまでさまざまである。

ちなみに人間界に侵攻してきたのは主にこの魔物たちで、魔族が操つていてる。

こいつらは、塔から湧き出てきたら周囲を完全征服する作戦で来た。侵攻するのは塔の周囲の半径約1500km（まあだいたい日本の北から南までが3000kmといえばわかりやすいかな？）を、現存する人間や動物を皆殺しにしているのだ。

だけど魔族どもはなんも考えずに塔を召喚らしく大半が海の上に出現したのだ、学校で習ったよね？ 地球は7：3で海が多いのだよ。つまり塔の半分以上は海の上で、空を飛べる魔物は少ないらしくあまり思ったようには侵攻できてはいないのだ。馬鹿だね～

それでもかなりの量の魔物が海の塔から来るけどね。海の場合はかなり広範囲に侵攻している、だから塔なんてないよ～って場所でも海岸に近いと魔物が上陸してきたりするのだ。ちなみに日本にも何回か来たよ、少なかつたけど。

で、日本の周りには塔はないので比較的安全というわけだ、塔が現れた大陸や国は悲惨らしい・・・。

特にアメリカは西海岸のLAという場所が廃墟になつたり、ほかにも大都市の近郊に現れた塔による被害でかなりの人が死んでしまつたというわけだ。

しかし、魔法使いたちが現れてから1ヶ月戦線は均衡状態にまで持ち直していたりするのだ。

そして、お待ちかね、俺の自己紹介といこうか。えつ？ まつてない？ 関係ありません、聞いて損はないよ。

おれの名前は如月涼きずなつきらう、高校3年生の今年で受験生だ、しかしある理由によって留年っているので年齢はまだ19歳。

その理由というのが魔法使い特殊訓練を行っていたからに他ならな

い。略して魔特訓。・・・微妙。  
つまり、俺は魔法使いなのである。

ここでの魔法使いに立ち位置を説明してあげよう。今日は親切さ、大盤振る舞いだな～俺。

まず、この世界の人たちは魔法なんてものは知らないし、大抵の人は魔力すら持っていない。稀に10万人に1人くらいの確率で魔力持ちの人間が生まれてくる、その人間を魔法使いの組織であるウィザード社がスカウトするわけだ。（名前隠す気ゼロなのにばれないのはなんか裏工作やつているらしい、魔法なんて反則技も使えるしね）

スカウトと言つても日常生活において普通の人として暮らせるように講習を受けたり、魔法の使い方や制御方法を教えたりしているので、魔法が使えない人とあまり変わらない生活が送れるわけだ。

その中でも魔法を使いこなしたいとか、役に立ちたいって人、または保有する魔力量が大きい人は、ある仕事を日常生活の合間にしている。

それは魔物退治！

黒い塔が現れる前も空間の亀裂や、人が多く死んで場が不安定になつた場所なんかで、たまに魔物が現れていたので、その退治や封印を行つてているのだ。

俺は魔法量が多いらしくウィザード社の人、「魔物退治やってみたい？」と聞かれたのが13歳、その時からちょくちょく手伝つていて、16歳のときに本格的に魔法を極めたくなつたので両親には海外留学と言つて（ちなみに嘘ではない、ウィザード社は世界中に支社を持っているが本社はヨーロッパにあるのです）2年間頑張つたら、元の素質もあつて世界でも10指に入る使い手になつてしまつ

た。

俺の能力？

あまり教えたくないけど……、ここまで来たら教えますよ～！

能力名はD a n c i n g g i r l o f s i l v e r y w h  
i t e

日本語にすると「白銀の舞姫」だつたかな。

ウイザード社の本社で魔法使い特殊訓練（魔特訓はなんかヤダ）を  
していたときに、俺の戦い方を見たお偉い方が勝手に名付けやがつ  
た！

偉い人にドヤ顔で、「どうだいいだろ」と言われたら、おととしか  
言えません、「まあ別にいいか」とも思つたしね。

けど日本語にするとこんな厨二表現になるとは思わず、あの時の俺  
を恨んだ、よく考えて返事をしなさい！

これでは、日本のじつかの馬鹿親みたいに子供に対して「悪魔」ち  
ゃんと名づけるようなものだ、けどこの子供って確かに結局は周囲の  
反対で改名してたっけ。  
逸れました……。

能力は某月の戦士よろしく変身します、全身白い巫女装束で青っぽ  
いラインが入ったものを身につけ、  
・・・・・女になります。

いや、なりたくてなるわけじゃないからね！  
そこ勘違いしないでもらいたい！

魔法に詳しいウイザード社のばあさんに聞いたり、俺の魔力の色つ  
てこうか種類？みたいなものが女の状態じゃないと使えないらしい、

確かに男のときは全く使えないけどね、魔法。

けどあんまりだと思って、「一度と魔法使わねえし…！」と誓つて  
いたんだけど、当時中学生の俺を言葉巧みに勧誘してきたお姉さん  
がいて、ふらふらつと一回だけなひとつOKしたら、いつの間にか世  
界最強クラスです。

どこで道を間違えたんだ？

技はなんか武器創つて戦う感じ、近接戦闘とかだね、見た目は。こ  
れはそのうちわかる・・・、今わかると思つよ。

ブーブーブブブ、ブーブーブブブ・・・

のんびりと家から駅に向かつて歩いていると、涼のポケットに入っ  
ている携帯が鳴り始めた。

この鳴り方の設定をしたのはウイザード社からのみだから、といふ  
ことは・・・。

ポケットで鳴つているauの最新機種を取りだして着信相手を確認、  
予想通りの相手だな」とか考えながら通話ボタンを押す。

「はい、ひづら涼です。」

「あ、涼ちゃん海から魔物の反応が迫つてきてるから撃退お願  
いできる?」

電話口に出たのは明るく快活な話し方をする女性、美鈴さんだ。

ウェザード社の日本支部の人で、中学の時に俺を洗脳・・・勧誘した人でもある。

「美鈴さん、ちゃん付けはやめてください」

「いいじゃない、女の子なんだし〜」

「こまは男です！それより、魔物つて日本に来たんですか？」

俺は彼女の間違いを訂正しつつ、本題に入る。

「わつよ、じつやりまたハワイの塔からこっちに来てこるらし〜の〜、探知魔法を使う子が言つてはあと一〇分くらいで千葉県到着だつて、お願いね〜」

ブ〜ブ〜ブ〜ブ〜

言いたいことだけ言って切りやがった、昔からなんか強引なところがあるんだよね、この人。

俺はぶつぶつ言いながら人気のないとこを探した。

なぜつて？

変身するのに見られたらまずいじゃん！

魔法は秘密だし。

俺は人気のない場所を見つけて変身する。

変身シーンは割愛します。妄想してあげてください。

短髪の黒髪から肩まで垂れる白銀の白髪に変わり。

身長150cmの幼さの残る少女といった姿になる。

そして、一息で飛び上がり普通の人では目視できない高さまで上がると、目的地に向けて全力で飛行を開始した。

「あ、今日学校サボりじゃん」

涼は飛び続けた。

これから自分の運命を大きく変えるとも知らずに。

## 第1話「魔族と魔法使いと自分」（後書き）

文章書くの難しいです、今まで本は読んできましたが書くためには  
読んでいなかつたので、その辺りを考えながら読んでいます。

なので、表現が他の作家さんと似てしましますかもしませんが許  
してください。

限界です、いっぱいいっぱいなんです。

字を打つのも遅いのでのんびり更新ですが少しずつ進めていきたい  
と思いますので、気長にお待ちいただけると幸いです。

## 第2話「バーで一杯を飲みながら・・・」（前編）

前話でちよつとこのことと修正しました。

勢いとノリで書いていたらおかしなところが出てきてしまったのです。

はい、すいません。もつと設定をしっかりと決めますです、・・・  
はい。

## 第2話「「一ヒーを飲みながら・・・」

「はあーーあ

涼はため息をつきながら眼下を高速で流れしていく景色を背景に、自分の胸元を見下ろした。

そこには慎ましくも確かに存在する2つの膨らみがある。

サイズはBに近いくらいだろう。

涼は両手で自分の胸を掴み、フニコフニコと揉みながらも思案顔でいる。

「なんで、俺だけこんな異常体質なんだろ・・・・・

その独り言に返事をする者など誰もいない。

いや、いたらおかしいのだが・・・。

「まだフニコフニコと手を動かしながら、今まで何度も何度となく呟いていたことを呟く。

涼は飛行中は比較的このような状態になるのだ。

「男の状態でも魔法が使えたらな~

この体質を知つて魔法を頑張ろつと決めた時は・・・。

なんで女だし！

と。

最初は落ち込んだし。

少し慣れたら興味もあつたからテンションが上がつたりもした。

けど最後は虚しいな。

身にならない思考を繰り返しながら飛行すること約2分。

目的地の千葉県から東に進んだ沖の海上。

海上自衛隊の軍艦が見えてきた。

人間と協力することになつてから、魔法使いは各国の軍隊と共に闘してこる。

涼はその上空に待機して敵がくるのを待つ。

「あつひー。」

今だに両手ではないものの、片手で自分の胸を触つてこるのに気がついた。

誰が見てこるでもないのに、慌てて離した。

涼も中身は思春期の男の子である。

女の身体・・・。

たとえそれが自分のあつたとしても、つい触つてしまつのは悲しい男の性であった。

ちなみに誰も見てはいなかつたのだが（むしろ高度が高すぎて見えない）。

慌てて胸から手を離して、その手をブンブンと振りながら、顔を羞恥に染める涼は、

誰が見ても、とても可愛らしかつた。

涼が春先とはいえ高度のため寒いほどの大空氣で顔の火照りを覚ましている間に、自衛隊の軍艦が遠田にも集まり始めていた。

あらかじめ警戒していたためか、短い時間で3隻ほどが眼下に布陣している。

また、もう魔族の気配を感じるほどになつた頃、援軍の魔法使いを乗せたヘリが到着。

それぞれの軍艦に2人ずつ乗り込んだ。

「みんなへりで来るつてことは飛べるやつはないのかー、戦力としては微妙だなー」

まあ、軍艦を守るへりこまでもできるでしょ。

それにギリギリだけど準備は整つたかな?

まつ、美鈴たちのことだから、そのあたりの準備とかは抜かりないはずだし。

俺は一匹も後ろに通すつもりは無いしな。

そんなことを考えながら涼の両手が光り始める。

光は両手から漏れ出し、前方へとフイイイイイントリとった音を立てながら延びていく。

そして「ゴベり」と光が止むと涼の手には一振りの両刃の剣が現れた。

ゆうべりと光が止むと涼の手には一振りの両刃の剣が現れた。

「草薙の剣、絶一乱！」

涼はブンッヒー振りすると正面の水平線を見つめる。

「来たか」

水平線と、雲ひとつない空との境界に魔物の群れを凝視する。

かなりの速さで近づいてくる魔物たちは、概算で2~300体ほどである。

「ちりに氣づいた魔物たちは、そのどれもが凶悪な殺氣を放ち我方に向かってくる。

それから目を離して静かに瞑った。

「へへへふううううう・・・

・・・・・・・・・・

「行くか!」

大きく息を吸い込み深呼吸して、「ノンマ一秒で音速を超える加速をつけて魔物の群れに飛んだ。

眼下的の軍艦では慌しく乗組員が戦闘準備をしていくかといつて、実はそうでもなかった。

常に警戒態勢にいるため、そんなに慌てる必要が無い」ともあったが。

一番の『氣の緩みは、今回の作戦に白銀の舞姫が参戦していることであった。

彼らも「こ」を抜かれたらやばいところとは分かっているので、戦つもりではあるのだが・・・。

過去に白銀の舞姫と共に魔物の撃退をした回数は4回。

1回目は、全力で援護をしようとするも白銀の舞姫が先行して魔物を殲滅してしまった。

2回目は、今度こそと追いかけるも魔物の数が少なかつたため瞬殺で終了。

3回目は、遠距離射撃するも狙つた魔物がミサイルに当たる前に倒されてしまい断念。

4回目は、戦闘準備をするもあきらめ半分で観戦することになり。

そして今回の5回目。

みんな戦つ気などほとんど無く、初めから観戦モードになつていて双眼鏡を片手に何分で終わるかの賭けまで始まってしまった。

さすがに上面に叱咤されるが、裏では普通に賭けが行われている。

艦長も気を引き締めるように命令したいが、どうせ見ているだけなのだし、やばくなつたら命令すればいいだろ。

と、窓辺で「コーヒーなんかを飲んでいるあたりは他の部下と同じじうな心境なのだろう。

そして、各艦に乗船した魔法使いたちは周りに乗組員たちが集まり、今回の魔物の群れ対白銀の舞姫の解説として活躍するのだった。

## 第2話「「一ヒーを飲みながら・・・」（後書き）

ちょっと短いけどもう愛嬌。

次回は戦闘開始の予定です。

### 第3話「巫女の能力」

涼の能力は、武器の姿形を強くイメージし。

特殊能力の有無を固定して。

魔力を注ぎ込む。

これで、武器が出来上がる。

一度作ったものは記憶に残るため、名を呼ぶだけで何度も出すことができる。

他の魔法使いが呪文を必要とするものが多い中で、涼のこの力はかなりアドバンテージが高いのだ。

そして、そんな武器を一振り携えて涼は飛んでいた。

お互に高速で移動しているので涼と魔物差はどんどん縮まってゆく。

魔物の大多数は飛行しているが、海中を移動しているもの、海上を走つてきているものちらほらと確認できる。

「毎回思つけど・・・、海上のやつら戦つ前からヘトヘトなんだよね、なんで陸上の塔の周りで戦わないのかな〜、やつぱりバカ?」

そう言いながら涼は背に背負つよつて魔力を集中させる。

・・・『シーカ・レイズ』

シユワアアアアア！

ヒヨンヒヨンヒヨンヒヨンヒヨンッ！

背後に光の珠が現れた。

といつても、眩しいまぶのではなく、ただ白い球なのだが。

球は現れた場所から動かず、どんどん涼と離れていく。

その球から剣山やハリネズミを思わせる量の、刃渡り15cmはある短刀が次々と出てきた。

短刀はイワシの群れのように集まり球の周りを旋回しながら数を増やしていく。

そして · · · ·

「食うえええええ！」

両手を後ろに下げる。

背で草薙の剣が交差し光を発し始めた。  
くさなぎのつるぎ

両腕を伸ばしたまま、体の横から腕を広げるよつに剣を前へ持つて  
いく。

草薙の剣は光を増幅させて2本の光の柱となつた。

次の瞬間、両剣は涼が横に両手を広げきつたときに魔物と接触。

ジユラアアツアアツ！

草薙の剣・絶は光に触れるものを鋭い切り口を残して塵ちりに変えながら。

草薙の剣・乱は光に触れるものをズタズタに千切り、やはり塵に変えながら。

巫女服の防御機能で自分の身体が傷つかない涼は、一気に魔物の群れの中心に向かいながら両腕を前へと動かす。

群れの中心で腕を前に振りぬいたとき。

魔物の群れは扇形にぽつかりと削り取られた空間が生まれた。

草薙の剣の光は収束して、その力を残したまま刀身を光らせるのみとなつてゐる。

「解放リベロ」

涼のその一言で、背後で短刀を出し続けていたイワシ・・・もどい短刀が流れるようにいくつもの群れとなる。

そして・・・。

ドスツ！ドスツ！ドスツ！ドスツ！ドスツ！ドスツ！

魔物を捕捉しては次々と突き刺さつた。

一瞬で魔物の群れは草薙の剣で、腕を、足を、身体を、頭を、全てを削られたもの。

身体じゅうに短刀が突き刺さり短刀の柄を外に向けた、逆針の山のようになつたもの。

これらが次々と落下していく。

ここまでの数秒で100体近い魔物を倒した。

涼は、この光景を見て戸惑う後続の無傷の魔物の群れの中心へと踊りこんだ。

「シーカ・レイズ」は、進もうとする魔物と海中及び海上の（バカ）魔物を標的として、川が流れるように短刀を生み出しては逆針の山へと変えていった。

また、生きたまま落下していく魔物にしつかりと短刀がとどめを刺していく。

その針の山となつた魔物を見た他の魔物たちは慌てて身をひるがえした。

しかし、それでも短刀は容赦なく近くの魔物を狙い攻撃を続ける。

魔物たちは必死に短刀から逃げようと後方へと移動していき、見つ

けた。

ただ逃げるだけで苛立ちが募る中、それを発散するための標的。

涼に狙いをつけた。

涼は舞う、その名の通り。

近づいてくる猿と虎を足して2で割つて蝙蝠の翼をつけたような魔物を右の剣で袈裟がけに両断し。

その勢いのまま下にいた猫から耳を取りはらつたような魔物の首を刎ねる。

空中で前回りの要領で一回転するよう回りながら、背後に近寄るボール型の魔物を左手の剣で刺し貫く。

剣が間に合わないときは、足で力の流れをいなす。

バランスを崩した魔物がそのまま、まるで魔物が自ら剣に飛び込むかのように切られていく。

向かってくる魔物を如才なく倒すという戦いを続けた。

はた目からは飛び込む魔物が勝手に剣に体当たりをして死んで行くよつに見えた。

涼は鼻歌でも歌うかのように軽やかに、淀みのない動きで魔物を狩つていく。

海中・海上の魔物は全滅。

空中にいるのも残り100体程が、短刀に追われて涼の周りにいるのみとなっていた。

「よし、そろそろかな」

涼はそんなことを呴くと草薙の剣を一度瞬またたかせて消してしまった。

魔物たちは光つた剣を見て警戒心を抱く。

しかし、剣が消えると今が好機と一斉に襲い掛かった。

「『てんじゆの羽衣』」

涼は一度ほほ笑むと両腕を左右に広げる、巫女服の袖から白い半透明のリボンが一筋ずつ真つ直ぐ伸びていいく。

リボンはその見た目と、柔らかな動きからは想像もできないような鋭さを持つて近くの魔物を貫いた。

そのまま貫き続け、何体かの魔物を仲良く串刺しにした。

身動きが取れずに暴れる魔物をしり田に、涼は腕を軽く動かした。

リボンは涼の動きに合わせて動き、魔物の身体をブチブチと引きちぎりながら外へと赤い血や、緑の血、紫の血を滴らせながら飛び出

した。

「さあ、<sup>フィナーレ</sup>終幕だ！」

そういつた涼の巫女服の袖から同じリボンが幾十も噴き出した。

リボンは緩やかに曲線を描きながら。

涼を中心に縦横無尽に動き出す。

魔物たちは成す術なくやられていく。

硬い亀の甲羅のよくな皮膚を持つ魔物は幾筋も纏まつたリボンに刺し貫かれ。

象のような体格に人の手を10本つけたような魔物は抵抗する間もなく両断され。

スライムのように切っても無駄な魔物はリボンが広がり込み込み、さらには何重にも包んだ後に内部が爆散！跡形も残らなかつた。

その姿は巫女といつには勇猛すぎた。

その姿は戦乙女といつには優美すぎた。

その戦いぶりは強靭であり。

その戦いぶりは流麗であり。

猛禽類を思わせる金色の瞳にま愛しさすら感じた。

幼さの残る顔立ちは美少女と断ずるに申し分なく。

肩口まで伸びる輝き現す白銀の髪を軌跡に残し。

清廉な純白に蒼の筋を持つ巫女服を身に纏い。

醜い魔物の中で舞う姿はどこか雄大である。

人々は教えられなくとも、彼女の戦う姿を見て、  
彼女が望もうが望むまいがこう言つた。

『白銀の舞姫』・・・・・。

涼はこの戦場を。

目で確認し。

知覚で魔力を読んで認識し。

リボンで触ることで触角を共有しているので感覚が伝わる。

それらを瞬時に理解、判断することで魔物個別に的確な攻撃を行つていた。

その戦況を見るために、涼は舞を踊り続けた。

「J1は戦闘区域から10kmほど離れた艦上。

「今日も瞬殺だな」

「ああ、もうすぐ終わつやうだ」

双眼鏡を右手に、「5分で終了」とこの賭け札を左手に持った乗組員が話している。

「それでいつも毎回悪いが、あのリボンは反則だな」

「どんな奴も狙われたら死ぬだろ」

「ワンースのマンガに出てくる自然系の能力者でも勝てないかな

「いや分からねえし、ナビ……、勝てねえんじゃね？」

「なんどよ」

「なんどなく」

「やうが……」

「ああ……」

実に平和であつた。

「これで終わりと

最後の魔物を仕留めた涼はリボンを納める。

そして、遠く海上に浮かんでいる軍艦に向かつて飛ぶ途中に、『シ  
ーク・レイズ』をしつかりと止めていった。

艦上では皆が喜ぶ中、何人かが手元の紙を見て落胆の表情を見せて  
いた。

### 第3話「巫女の能力」（後書き）

戦闘の描写つて書くの難しいです。  
読みにくかつたら申し訳ない。

今回の話で涼の能力がだいたい説明できたと思います。

これからもいろいろな種類の武器や強力な武器を見せていただきたいと  
思うので、のんびりとお待ちください。

## 第4話「パレード」

俺は今、援軍に来た魔法使いたちと共に東京で軽い凱旋パレードっぽいことを行っている。

実際のところ援軍の魔法使いたちは活躍することはなかつたのだが・・・。

人々の前で天皇様よろしく手を振つてゐるのである。

普段なら絶対に参加しないのだが、今回はある事情により参加せざるを得なかつた。

「めんどくさいな～・・・」

早く家に帰つて寝たいのにな～。

1人ぼやく声は周囲の歓声によつてかき消されてしまつた。

それは、今より30分ほど前。

『・・・おーい、聞こえる？』

『涼ちやーん。』

援軍に来ていた艦隊の上を旋回して、  
それで、帰るかな・・・。

と思つたとき

よく聞きなれた声が頭の中に直接響いてきた。

「うやん付けはやめてください、美鈴さん」

「ひづれ」とはしつかつと言つておぐ。

「うづれ」のは繰り返しが大切だ。

だけど・・・。

わざわざ携帯で連絡してきたのこ、なぜに今は念話何だりつへ。

今も携帯を使えばいいのに・・・。

実際は念話のほうが便利だけどな。

「・・・ああそつか!」

そこまで考えて気付いた。

変身前に身に着けていたものは洋服から携帯から全て分解されるんだった。

つまり簡単に言うと某月の戦士（2回目の登場）のようない一度全裸になつてからこの装備になるから、変身前のものは無くなるといつことだ。

セリー

変な想像しないよつて！

ちなみにそれらがどうに消えるかは謎だ。

いまいちその辺りが分からぬ。

自分の能力なのに……。

まつ、変身を解けば戻つてくるから結果オーライといつことで……。

だから今は携帯がないので念話ね、なるほど。

『……い、き……』

ん？

『……聞こえるか？』

やべー！

美鈴さん無視して考え込んだじゃったよ。

「いや、聞いてましたよ」

『ウソでしょ。』

はい、看破されました。

「聞いてなかつたです、すみません。・・・で何の用ですか？」

都合の悪いことは忘れて本題に入りましょう。

俺も話したいことがあつたし、ちゅうどよかつた。

『ん～。連絡事項と結果報告の確認だよ。まず連絡事項だけど、局长が今日も下痢でね、10日連続でさ～そろそろ死んでほしいのが一点。シンガポールの援軍に行つてた神楽ちゃんが1時間前に、戻つてくるつて連絡があつたのが一点。日本海でたつた今戦い終わつた駿介くんが、空間移動系の魔物を逃がしたらしくから一応に気をつけといてつてのが一点。最後に涼ちゃんように洋服用意したからせひ着てほしつてのが一点。こんなものか～。涼ちゃんの結果

はどうだった?』

なんか基本的に全部ビリでもいいような情報だ。

しかも、つっこみどり満載でどうしてやるつか、と考えて……。

はああーああ。

とため息をついてスルーすることにした。

「君ちはおよそ00いた魔物を殲滅しました。被害は無し。けど一つ気になることがあります。」

俺は美鈴さんの話など何もなかつたかのよつて事務的に淡々と話す。

「魔族が一人もいませんでした。とくに先導している強力な魔物がいたわけでもないのに妙だつたんですよね。まあ戦いが楽だつたらよかつたんですが。」

そう、俺が戦つた群れの中に魔族がいなかつたのだ。

基本的に魔物は動物と同じよつなものなので自由に気ままに動き回る。

だが魔族は彼らを自らの魔力で持つて多少意のままに操れるらしいのだ。

だから魔族の強さにものよるのだが、大抵300もの魔物の群れであつたら4～6人は魔族がいるはずなのだ。

でなければ魔物は勝手に動き回ってしまい、人間界を意思を持つて侵略など到底できない。

たまに意思を持つ強い魔物も生まれるけどな。

意思を持つ魔物はごく稀、魔物は魔法なんかは使わない（使い方が分からぬいためほとんどは身体強化などに使われる）けど、意思のある魔物は魔法を使いこなすので下手な魔族よりよっぽどたちが悪かつたりする。

同じ魔物といつことで統率力が高いからな。

まあ俺には全く関係ないけどね。

多少強いくらいなら油断しない限り負けることはまずない。

つまり、魔族もいなければ、意思ある魔物もいなかつたのが気になつたというわけだ。

美鈴さんは美鈴さんで先ほど『ちょっと待って』と言つたきり、なんの反応もない。

どうしたのかな～、聞いてみよっ！

待つつて苦手なんだよね、俺。

「みれ」

『オッケー！決まったよ、涼ちゃんとりあえず東京の本社に来て』

先手を取られた・・・、つていうかなんだつて？

「いやです！」

断固拒否しよつなんかめんぢくせんつだ。

『拒否は認めません、命令です』

「実は用事が……」

『ウソはためですか？』

美鈴さんの強引さは昔から知っていた。

だからこんなときの対処は・・・。

「わかりました」

言ひ「」とを聞くしかないのである。

情けないとか言うな！

『初めから素直に従つておけばいいのさね～。そうだ！ついでにパレードにも出なさい！あなたが出ればみんな喜ぶから一石二鳥よ～。』

「え？！？・・・・・はい」

俺には拒否権なんてないんだな）。

そんなふうにしみじみ思つてゐる・・・。

『何着てもうらおうかな』

そんな声が聞こえてきた。

なんか上機嫌に鼻歌まで聞こえてきた。

つつ！？ もやか！？

「洋服は着ませんからね！！」

『元』

そこだけは断固拒否しておいた。

NOといえる人間になるのは大事だよ・・・・、うん。

そして、今は道路の真ん中を歩きながら手を振つてゐる。

なんかすゞしつねせい。

—ひさーさー、ひさーひ、ひさーひ、ひさーひ、

なんかいろいろ言つているのが聞こえる。

「おや、本物だ！」

「綺麗な髪、天使みたい！」

「魔の坡アニムツーリー、元」

「なんか魔法見せて〜！」

「俺の嫁〜〜〜！！」

「…」見つかり見て…」

など雑音と化しているが耳をすませると色々と聞こえる。

何人か変態な奴がいたが無視だ！無視！

「めんどくさいな～」

やつぱりげんなりしているが営業スマイルは忘れない。

一応國のヒーローっていつか、アイドルみたいになつていてる感じ！

普段いつも場に顔を見せないから神聖化されているっぽかった。

見た目が確かに神秘的だしな。

そんなことを考えていると…。

トスッ

首に何かが刺さった。

## 第4話「パレード」（後書き）

続きの話今書いているのですが出ます

たぶん・・・

## 第5話「最後の言葉」

トスツ

首に何かが刺さった。

敵なんかいないと思っていたので、顔周りの結界を解除してあつたのである。

「なっ！？」

急いでそれを首から引き抜く。

注射器だった。

羽根のついた注射器。

なんでこんものが・・・。

そつ思つ間もなく強烈な眠気が襲つてきた。

「くつ……」

一気に全身の力が抜けていく。

そのことに気がついた周りの市民が何人か悲鳴を上げる。

刺さつてからかなり素早く注射器を抜いたのによく気付いたな……。

なんて考える余裕さえない。

乱れていく魔力をなんとか整えて、周囲を観察して……。

「見つ・・けた・・」

注射器が飛んできた方向を知覚の田で凝視すると銃を持っている男を発見。

「天女の・・・羽衣・・」

そういつた俺の巫女服の袖から半透明のリボンが伸びて、一瞬で男を簣巻きにする。

リボン越しに、男の思考を読む。

『見つけてくれた！俺だけの・・・！俺だけの舞姫だ！俺から迎えに行こうと思つて眠つてもらつたけど、君から来てくれるなんて感激だ！

さあ！一緒に行こうよ。

俺は君のために生まれてきた。君は俺のために生まれてきたんだ！』

精神が病んでいる・・・。

考え事をしていたとはいえ、殺氣がなかつたので気が付けなかつた。

殺してやろうかとも思つたが、やめておく。

こんなやつ殺す価値もない。

羽衣を切り離して簾巻きの状態の男を放置する。

注射器に気がつかなかつた周りの市民たちや後方の魔法使いたちは、突然『天女の羽衣』を出した俺に驚いているが、今はそれどころではない。

一体どんな薬を使ったのか分からぬが強烈な眠気は一向に覚める気配がない。

「く・・・そ・・・」

俺は耐えきれなくなつて片膝をついた・・・・・・、

強烈な魔の気配を感じた。

正面の50㍍ほどの距離、地上から5㍍くらいの位置に何かが現れた。

普段の俺ならなんともない距離。

普段の俺ならたいした事の無い魔物。

けども、・・・・今は違った。

全身が紫色で象並みの大きさ、動物といつより、形を捉えづらく不定形で無機質に近い身体を持つた魔物は、空間の亀裂のなかで真っ白な魔法使いを見ていた。

あいつを食べたい。

そう思つたが、ついわざとおいしくなさそうな魔法使いと戦つたときには怪我をした。

だから今食べに行つてもやられてしまつかもしれない（無傷でも殺されるが本人は気づいてない、所詮けものだから）。

だけどチャンスが来た。

真つ白な魔法使いの魔力が突然乱れ始めたのだ。

フラフラと頼りなく、今に倒れてしまいそうだった。

今なら・・・・、

殺せる。

意思のある魔物は涼を殺すために空間から這い出した。

魔物は空間の裂け目から姿を現して1秒も時間をおかずに、その不定形で生物のようで無機質の硬さをもつて体表から、直径10cmで長さ1mはある棒状の物体が突き出て、涼に向かっていくつ

も撃ち出された。

「ヴォオオオオオオオオオオオオオオ！」

- 7 -

声といひよつば音。

けつして生物には出せない異質な音を空気に震わせて、魔物は涼に

## 攻撃を続ける。

涼は必死で朦朧とする意識の中リボン状ではなく、広げて羽衣状にして攻撃を防ぐ。

魔物の攻撃はただの質量てきな重みだけでなく特別な負荷も掛かっているらしく、羽衣一枚だと2発くらいで抜かれてしまう。

意識を保つため自分で自分の身体を傷つけるが、ほとんど効果がな

次々に飛来する紫色の棒を受け止めるため羽衣を幾重にも展開していく。

涼の戦闘のスタイルとしては受け流すほうが得意なのだが、注射器の催眠剤で意識がはつきりしないため『天女の羽衣』を精密に操作できないことと、受け流せば周囲の市民にまで被害が出る。

だから、ほんらい得意としない真向うからの攻撃を受ける羽田になつていた。

「ここのときてよしひやく後ろにいた魔法使いたちが援護をしてきた。

しかし。

「やめ…………ら……」

涼はそれをとめようとするとが声がかされる様にしか出ない。

後ろの魔法使いたちでは束になろうがこの魔物は倒せない。

殺されてしまふのがわかる。

それを止めようとすると、涼が何も言えず、何も行動できないうちに彼らは動いた。

「つおおおおおおーー！」

「舞姫様から離れろおおおーー！」

「オオオン！

ガギギイイン！

キンキンキン！

魔法使いたちが攻撃するが魔物の皮膚を軽く引っ掻いた程度にしか傷を与えられなかつた。

「ヴォオオオオオオオオオオオオオオオオ

魔物は奇怪な音を発すると、田ぞわづとばかりに後ろの魔法使いた

ちに對して紫の棒を擊ち出す。

涼は魔法使いたちを守るために羽衣を広く展開する。

ズバッ！

紫の棒を防衛して、いた羽衣。

広く展開していたことで薄くなつた防御を1本の棒が突き抜けた。

トカツッ！！！

紫の棒は真っ直ぐに涼に向かって飛んできて、涼に直撃した。

巫女服の防護機構によつて傷は負わなかつたが衝撃で地面にたたきつけられる。

ななめ上からの攻撃は涼を吹き飛ばすのではなく、仰向けに倒れた涼をその場に縫い付けた。

ドカツ！

ドカツ！

一度抜かれるとあとは次々と棒が身体に当たる。

味方の魔法使いの1人がなんとか攻撃を防げり、前に飛び出し、何本か耐えただけで肉片に変わっていくのを、涼は別の世界の出来事のように見ていた。

もはや『天女の羽衣』は紫の棒を半分ほどしか防御しておらず、羽衣を突き抜けた棒のうち3分の1は涼の身体に命中する。

「あ・・・ぐああ・・・、ぐあああああ・・・」

涼は棒のあたる衝撃と催眠剤によつて半分以上の意識が飛ばされる。

碌な抵抗も行えず、されるがままとなつていた。

ビシッ！

それまで棒をはじいてきた巫女服。

その防御機構が不吉な音を立てた。

ビシビシッ！

パリイイイインンン！

巫女服の防御機構が砕けた。

## 次の瞬間！

涼の右のわき腹に直径15cmの紫の棒が深々と突き刺さっていた。

魔物に攻撃をやめなし

棒は防御することのない涼の身体を蹂躪する。

右足の先が叩き潰される。

左手のひじの部分が半分えくれて、腕はかすかにつながっているだけとなる。

右の肩口に当たり、涼の身体が衝撃で跳ねて純白の髪を血で赤く染めていく。

身に纏う白い巫女服は涼の身体を守ることはず、傷跡から赤い血の染みを広げていった。

周りにいる人々は、この一方的な殺戮をなにもできずに、皆一様に蒼白な顔で見つめていた。

「あ・・・・うああああ・・・・うあああ・・・」

涼が声にならぬつむぎをあげる。

お・・・・れ・・・、死ぬ・・・・・のか・・な・・・・・・・・

手を動かそうとして動かないことを気付いた涼は、最後に自分を殺すであろう魔物を見ようと、意識を手放しかけていた脳を動かし、瞳を開けた。

その眼には、紫色のよくわからない形の魔物が写る。

は・・・・はは・・・、みに・・・・く・・・いな・・・

・・死に・・・・た・・・・くねえな・・・

そう考えて意識を手放す瞬間に・・・

醜い紫色の魔物が粉々になつたように見えたが・・・

涼にそれを確認する力は残つておらず・・・

静かに目を閉じた。



## 第5話「最後の言葉」（後書き）

自分で書いていてテンション下がってきました。

## 第6話「俺が魔族の嫁にー!？」

近づいてくる紫色の圧倒的死の予感。

逃げようとするが足が動かない。

魔法を使おうとしてもなぜか発動しない。

やめろー来るなあ！

声を出せつとしでも出ない」とこ气回がついた。

紫の棒が近づいてくる。

それが今まさに自分の身体に刺さる瞬間！

荒い息を吐いて布団の中で田をあける。

—Φ···ε···?

今のが夢だったのだと気がついて安堵の息を吐く。

一 痛

身体が痛い。

魔物に貫かれた場所が痛い。

その痛みで完全に現実に引き戻された。

## 自分を襲つた魔物のこと

普段の自分ならそれほど苦戦することのない魔物だった、だけど催眠剤を打たれたためまともに戦えなかつたこと。

そして身体に走る激痛と、命が抜けていく感覚。

全てが鮮明に思い出される。

「は・・ははは、俺・・・・生きてたんだ・・・・」

涼は布団に横になつた状態で声にならない笑いをあげながら、目を

閉じて涙を流した。

一通り泣いて落ち着いた涼は、自分の身体が動くことに気がついた。あれだけの攻撃を受けたにもかかわらず、腕や腹の傷はほとんど塞がっているようだ。

さすがにまだ動かすと痛いが我慢できないほどではない。

涼は起き上がって布団の上に座った状態で周囲を見渡した。

今自分が寝ているのはベッドである。なんの飾り気もないが無駄にでかい、ダブルベッド以上はあるのではないか？

「どこの貴族だ〜！」と叫びたくなるでかさである。

部屋は石造りで灰色の石が見えているのだが汚いとか、冷たいといった雰囲気はなかった。広さがまたでかい、バスケットのコートくらい広い部屋だが扉が見えるのとこの部屋だけではないのだろう。

「一体どれだけ広いのや〜？」

壁には絵画や剣が飾つてあるが、田立つようなものではなく壁と一体になつているかのようであつた。

どうとなくぞみしい部屋だな。

全部の部屋が一ひとつ同じとは思わないけど、それにしてもなにもな

わあざる部屋だ。

けど、ここがどこであるかはわからなかつたため、涼はちよつと調べてみよつと布団から出た。

「よつとー。」

布団から這い出した涼は、裸足で石畳の床に触れて案外冷たくないことに軽く驚いて・・・

自分の姿を見てもつと驚いた。

「なんだこれは～～～！！！」

身体の傷がないのは回復系の魔法でも使って、誰かが直してくれたんだと思つ。

あれだけの怪我がよくここまで治つたものだ。

それよりも、まず性別が女のままだつた。

変身中は常に魔法を使つてゐるような状態だから女になつてゐるが、意識を失つて時間がたつと男に戻つてしまふはずである。

それが弱点でもあるのだが・・・

だが、今の涼は女の状態である。

あれだけの攻撃を受けて、意識を失えば絶対に男に戻っているはずであった。

あともうひとつ。

「なんでドレス……？」

そり、涼はドレスを着ていたのである。

真っ白なドレス、無駄にフリフリした装飾が多いが見よつによつてはウエディングドレスにも見える。

「わけがわからんねえし…」

そつ言つて涼は巫女服に換装しようとして魔力を込める……が。

「なん……で？」

魔力が集まらない。

試しに武器を出やつとするが全く出でになかった。

「ふん！ふん！」

腕を振りながら力づくで「出や～」とかやるが、全く反応がなかつた。

「もしかして……、俺……魔力が無くなつたのか？」

そうじつて涼は首を振った。

「いやいやいや、そうだったら俺が女のままのわけが無い。といふか目が覚めてからわけがわからんことばかりだ」

キイイイイ・・・

そう言つて涼が部屋を物色しようと歩き始めた時、扉が開いた。

扉が開く音に気がついた涼は、その方向を凝視する。

そして、開ききった扉の前に立っていたのは一人の男だった。  
190cmはあろうかといふ長身に切れ長の瞳、短い赤髪を軽く遊  
ばせている、西洋の世界から抜け出してきたような印象だ。

男は涼のことを観察しながら無言で涼に向かって歩いてくる。

「な・・・・なんだよ・・・・」

何なんだよ」とつ。

涼が若干身を引きながら警戒していると、男は「ひかりを見下ろしな  
がら涼から2mほどの距離で立ち止まる。

「ほお、似合つてゐるじゃねえか」

は？なんだこいつー。

「うるせーーー俺の趣味じゃねえー！」

男は、「~~~~~」と笑つてまるで意に介さずに笑つ。

「ソレだーそしておめえは誰だーーー！」

こいつ、なんかムカつくーー

男は涼の言葉を気にした風もなく、手を横に広げてやれやれといつたような態度を取る。

渋谷とかのナンパ師っぽい雰囲気もある。

いちいちムカつくやつだ。

「こいは魔界だ、お前らの住んでる人間界とは次元の違う世界だ。そしてこいは、王都ラディスオン帝国の城にある俺の私室だ。あと、「おめえ」ではなく、バストマ・クレルという名がある、クレルと呼べ」

すげー上から目線で話してきやがるー。

「ジジがどこかは分かつた。で、なんで俺はジジにいるんだ!」

「俺がさらつてきた。人間界になかなか強い面白い女がいると聞いていたのでな、観察しに行つたわけだ。そしたら、あの程度の雑魚魔物に殺されかけていたからな、助けて連れてきたつてわけだ」

ぐう・・・・、最後にあの紫のやつが碎けたように見えたのは現実  
だつたのか・・・。

なんか魔族に助けられたなんて訝然としないが・・・。

「・・・・ありがとう。・・・一応命の恩人だから礼だけは言つておく、もう帰つていいか?」

こんな感じに長居をする気はない、といふと帰つてやる。

「それは無理だな、お前はこの俺の嫁になるのだから」

「は？」

「聞こえなかつたのか？嫁になれと言つたのだ

いやいやいやいやいやいやいや

意味わからんねえし、意味わからんねえからね。

なんで？

Why?

こいつ頭おかしいんじゃねえか？

「無理ー。」

涼は腕を交差させてバツの形を作る。

「拒否権はない。命令だ」

「いや無理だから。意味分からないからー。」

クレルは一度思案する顔になると、「しかたないな～」といつ態度で話し始めた。

いちいち瘤に障るやつだ。

「俺たち魔族の嫁探しは大変なんだよ。貴様ら人間と違つて魔族は寿命が長いが子供を作るのは難しい。性交なりキスなりして男の液体が女の中に入ると魔力も一緒に流れ込んで、このときに男の魔力が女よりも大きすぎると・・・。ボンツ！と女が弾けるわけだ。だから子供を作るには自分よりも魔力の高い女か、同程度の魔力を持つ女が相手じゃないと、女が死ぬ。分かつたか？」

「・・・・いや実際興味はないけど、その辺の事情はなんとなくわかつた。・・・で、なんで俺？」

「人間相手でも子が成せるらしいからな、文献で見たことがあるが、昔そんな奴がいたらしい。それに、姿を隠してお前の戦いぶりを見ていたが、お前の魔力の強さと波長は俺のとかなり近いからな、だからさらつてきたってわけだ。けどあの魔物が出てきてラッキーだつたな、お前と真っ向から戦ついたら俺が勝つにしろ大変だつただろうからな」

「さつき俺が言つた礼を返せ！見てたのかよ、変態が！それにお前たちの魔族事情など知らんし、おれは男だ！なんで男の俺が、男のお前の嫁にならなきやなんねえんだよ、お断りだね！」

矢継ぎ早に発せられる俺の罵倒をまったく気にせず受け流しすクレル。

「お前が男と言つるのは俺も驚いた、運んでいる最中に男になつたからな・・・」

「じゃあ、なんで今は女になっているんだ。俺の意思じゃないとこの姿にはなれないはずだぞ」

涼はまだ警戒しながらクレルをにらみつける。

実際背の低い涼が、背の高いクレルをにらみつけると上目遣いのようになるので、かわいい雰囲気しか出でていが涼は全く気が付いていない。

「・・・・・！」

クレルは若干目を逸らしながら俺の左の手首を指差した。

ん？ 手首？

左の手首を見ると何か薄紫色のカーテンのよつな、オーロラのよつなものが纏わりついていた。

なんだこれ？

「俺の魔力で固めた枷をお前の腕に付けた。それには女の姿を維持しておく能力と、お前の魔力を抑え込む能力が付加されている。男の姿のお前など興味がないからな、俺がその魔法を解かない限りお前は一生女のままだ。だからなんの問題もない」

な

ふ・・・・ふざかるな、一生おんなのままだと、そんなことはお断りだ。

黙じて拒否する

「分かつたら嫁になれ。これはもう決定事項だ」

知つたことか！

『JELLINE』

俺はクレルを無視して、腕に付いているオーロラのような腕輪を取ろうとするが、まるで空気のように触れることができない。

など試しても何の効果もなかつた。

クレルはそんな俺を見てため息をつくと手招きをしてきた。

「どうあれ、こつちに来い」

「断るー近づくなー！」

# 誰が行くかバー力！

「つたぐ・・・」

クレルが涼の視界から消えた。

「えつ・・・・・、うわああ！」

一瞬で涼のそばに移動していたクレルは、ひょいと涼を肩に担ぎあげる。

「な・・・な・・・、は・・離せ！降ろせ！触るな！」

いきなりのことに動搖した涼はわめきながら暴れるが、力を完全に封じりれているため全く抵抗という抵抗もできていない。

クレルは涼を抱きあげたまま部屋を出て、どこかに向かっていた。

「は～な～せ～よ～！」

涼は手と足をばたつかせて抵抗を続ける。

「うわせえー！」

パンッ！

クレルがいいかげん堪りかねて涼のお尻を叩いた。

「ひゅあせひー！」

え、何今の？

# 俺の ・ ・ ・ 声? ?

自分でも理解できないほど高い声で悲鳴を上げたことに驚く涼。

「ほりほりほりほりかわいい声で鳴くじやねか」

ケレルはそう言いながら何度も涼のお尻を叩く。

涙には涙にて抵抗する」となく弱弱しく抗議をする。

最初からおとなしくしてしれにしんだ」

そう言って聞くことをやめてくれたクレルだが、もう10回以上叩かれた。

לְיִרְאָה וְלְעָמָד

いたい  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
おしりかく

唸りながら干された洗濯物のよつに無抵抗になる。

クレルは階段を降りて、廊下を歩いて。

10分ほどで立ち止まつた。

「ほら、着いたぞ」

そう言ってクレルが降ろしてくれたのは、すこしぐめじめとした暗い石の通路。

等間隔で灯された松明が僅かな明かりを通路にもたらしているが、それでも夜の月明かりよりも頼りない。

「お尻が～～」

お尻の痛みでちゅうと歩きにくいので歩かない」とこする。

涼は、そして周りを見回した。

「なんか牢屋みたいな場所だな」

「ここは牢屋だ」

クレルが松明を持ってきながらそう言った。

「ま、まさか俺を閉じ込めるのか！？」

・・・・・いや、けど・・・この嫁と虜囚の身となり、牢屋のまうがましかもしれない・・・・・

涼がそう言つてぶつぶつ言つていてクレルが松明で辺りを照らしながら歩いていく。

「俺が自分の嫁にそんな事をするわけがないだろ。それよりもこれを見ろ」

バカがお前?と言つているかのような顔をして俺を見降ろしてくる。若干いらっしゃるクレルが照らした牢屋の中を覗き込むと、そこには20人ほどの人間が捕まっていた。

「なんで、人間がいるんだ?これも嫁とかにするつもりか?」

涼が本気でそんなことを言いながら中を覗き込む、中の人間はこちには特に関心がないようであちらとこっちをみたがあとは無関心だった。

「これは、お前のために用意した人質だ。俺の嫁にならなければこいつらを一人づつ殺す。わかったか?」

クレルは松明でわずかに見える暗闇の中、それでもはつきりとわかるくらいに満面の笑みで言い放つた。

「そんなの卑怯だ!それに俺は男だつて言つただろ!」

「そりが……、残念だ」

そう言つて、クレルは松明を持っていないほうの手を牢屋に向けていく。

その手に魔力が集まり始めて・・・

くつゝそ～～～！

なんで、俺がこんな目に！

「分かった！なるよ！なる、お前の嫁になるからその手を下せよ、  
・・な」

「そうか、それは良かつた」

クレルはそう言つと元来た道を戻り始めた。

「こいつ、絶対にうだ。

不本意だが嫁になるしかないらしい・・・・・。

だけど、それならこいつの寝首をかくことも可能つてことだ。

それに、この城の王を倒せば人間界の侵攻も終わりになるんじゃねえか？

だったら、むしろこの状況はラッキーだったことか・・・・・。

「そう思わないとやつていけねえよ

涼は、ぶつぶつと呟きながらクレルの後を着いていった。

## 第6話「俺が魔族の嫁にー!?」（後書き）

文才がー、文才がほしーよー

とこいつことで、ようやく嫁になりました。

あとほかにふくらませることができるかがカギですね。

最後に、もし暇があるようでしたら「意見・」感想お待ちしております。

ではノシ

## 第7話「俺から私」

「……はあ……はあ、といひやで……お前はいつから……俺に目をつけたんだ？」

涼はクレルの背中をトコトコと小走りに追いかけながら話しかけた。

身長差40㌢くらいもあれば歩幅にも大きな違いができる。

先ほど「もつとゆっくり歩け！」と言つたら「走れ」と返されてしまい、魔力0の状態のため身体能力の向上もできない涼は頑張つて付いていくしかなかつた。

クレルは涼の質問を聞き、眉をひそめた。

涼はクレルの後ろ姿しか見えないため、その変化に気づかず、「なんでだ？」と小走りしながら繰り返し問い合わせる。

「おー……」

「うわっと……、なんだよー。」

クレルが突然立ち止まり振り向いたため、止まり切れなかつた涼はクレルにぶつかりそうになつて、慌てて手を出して顔面衝突を回避する。

身長差的に正面に出した手はクレルの腹に、ぼすっとつ軽い音とともにあたることになる。

「腹筋硬いな」なんて考へてる涼を見下ろしていたクレルが、涼の頭をつかんで引き離した。

「うい・・・」

「何をしていろ・・・。いや、どうでもいい・・・、貴様はこれから『俺』と言つ」とを禁ずる。なんか気に入らんあと俺の「こと」はクレルと呼べと言つたはずだ」

そんなことを言つてクレルが俺の「こと」を見下ろす。

「お前のこととをクレルと呼ぶのは別に問題ない・・・。だけど、俺と言つのを否定されるは嫌だ。俺はあくまで男だ！」

「気に入らん」なんてわけのわからない理由で一人称を変えられたまるかっての。

「前に言つたはずだ、貴様に拒否権は無いと、『俺』ではなく『私』と言え、さもなくば人質を殺す。わかつたな」

クレルは言つたことを聞こえないとさつやと後ろを向いて歩き始める。

なんだ、あいつは～～～！

自分の言つたことだけ言いやがつて、しかも、わ・・・わたしつて女みたいじゃないか！

「くそつたれ！ふざけんな～。ぱーかぱーか・・・・・」

クレルに聞こえないように小声でむなしい抵抗をする涼。

「何か言つたか？」

振り向きやがつた～！

クレルは立ち止まって涼を見つめる。

「え・・？あ～～、その～、あれだ・・・・・、そう・・名前！俺の  
な・・・じやなくて、あつと・・・、わ・・・わた・・・わたしの名  
前は涼だ！貴様じやない！おま・・・、クレルも、お・・・わたし  
のことは涼つて呼べ」

何を言つているのか支離滅裂になつていて、頬を上氣させて手  
を、わたわたさせている涼のこと見ていたクレルは、手を伸ばして  
涼の頭をがしつと掴むとぐりぐりと撫でる。

「それもそつだな、これからは名前で呼ぶとしよう・・・・・涼」

頭が身体にめり込むほどに力強く押し込まれるよつて撫でられてい  
た涼は、うあああああ・・・・・と呻く。

だが、いいかげんにやめろ～と言つて手を振り払う。

クレルは気にした風でもなく、軽く笑いながら歩くペースをやつす

よつも少し落として歩を出すのだった。

石の壁に石の床の部屋。

しかし、床にはフカフカで毛の長い一畳で高級なものだと分かる絨毯が敷き詰められ、壁には草原と青空が描かれた絵画に、見たことのない文様が記されたタペストリーが品よく掛けられている。正面には陽光を取りいれる無駄に大きい窓ガラス、それを開けると大の字になつて寝ても余裕があるテラスが静々と佇んでいる。椅子や家具はゴテゴテした装飾は見当たらずシンプルでいて、しかし安物という雰囲気は感じない落ち着きがあった。

落ち着きのある高級ホテルのようである。

「はああああ～～

涼は目を丸くして部屋を見て回っていた。

いくら人間界で10指に入る魔法使いだと見つても出身は一般人の出なので、涼は高級ホテルなんて縁も所縁もない。

テレビでは何度か見たことはあるのだが、実際にそれっぽい部屋を見てみると違うものだ。

「クレル！ここお前の部屋だろ～、無駄に広いなオイ！」

涼は興味心身に部屋の調度品を見回しては「ほ～」とか「へ～」とか呟きながら、ちょこまかと動き回っていた。

クレルは部屋に常駐している侍女から紅茶を受け取り椅子に腰掛け  
て、ゆっくりと飲みながら涼のことを田で追っていた。

「といひでや~

あらかた部屋を見終わった涼は、とうの昔に飲み終わった紅茶の力  
ツブを机に置いてのんびりとしているクレルの前に移動して、「・  
・ん」と言いながら仁王立ちして顔を顰めて腕を突き出した。

クレルは怪訝な顔をしてその手をスッと流し見て、涼の顔を窺い見  
る。

「……これ、はずせ」

淡い紫のオーロラを纏う腕を突き出した涼は、クレルを睨みつけな  
がら口を尖らせる。

「ふん・・・・・、断る」

「だらうな・・・・・、じゃあ魔法を使えるよひじや」

「・・・それなら良いだろ、元から魔力は使えるよひじやる  
つもりだつたしな・・・・・」

クレルはそう言ひとスッと涼の腕輪を見た。

オーロラを纏う腕輪が光るなどの変化はなかつたが、涼は自分の身

体の奥から暖かいものが満たされてくるのを感じる。

「あー、これが魔力なのかなー、いつも魔力なんて身体に満ちてるものだし、初めての感覚だー。」

そんなことをボヤーと考へて、間に魔力の充足が収まってきた。

「ん？ おークレル。なんか魔力量足りないぞ、返せー。」

自分の普段の魔力量なんか完全には把握していないが明らかに足りないということは分かる。

「全部戻して好き勝手暴れられたら堪ったものじゃないからな、だいたい三分の二くらい使えるようにしてやったんだ、ありがたく思え」

なんか腹立つんですけど！

「この人ムカつくんですけど！」

「すげえ偉そうにふんぞり返りながら感謝しちとか・・・・、お前のせいで魔力使えないんだから！」

とは言えない。

くそつ、・・・・けじ全部戻さないのは納得いく。

俺だつてあいつの立場なら全部なんて戻さない。

それ以前にいきなり攫つた拳句に求婚なんて迫らない。

「まあ、いい」

クレルの言つことはすべて無視することにした。

涼は踵を返して距離を取る。

「『草薙の剣・乱』」

涼の右手が光り、光が伸びる、一定の距離まで伸びた光は収束して一振りの剣が姿を現した。

調子を確かめるように3～4振りして再び光とともに剣は姿を隠した。

「ふむ・・・・」

問題はないかな、多少力をセーブする必要があるかもしけないけど、なら・・・・。

## 「『天女の羽衣』」

前に羽衣を出したときは白い巫女服の袖口から現れた羽衣だったが、今は巫女服ではなく白いドレスを着ている、もちろん袖口からなど出せないため羽衣は涼の身体に纏わりつくように姿を現し、両腕から足元まで垂れるくらいの長さで風もないのにゆらゆらと揺れていった。

「お、出た出た。・・・・・どれつ・・・」

そう言いつと腕を払つようと横に伸ばすと、羽衣も一緒に動き、そのまま伸びていく。羽衣は伸びた先の椅子を持ちあげて器用にぐるっと回すと、またもとの位置に戻した。

「問題ないかな・・・」

実際、普段戦うときとかもよつぱんどの相手じゃない限り全力で戦わないからな。

多少力を抑えられてもある程度まではいつも通りってことか・・・。

そういうえば、まだドレスのままだつたな、普段巫女服で一応アレも女ものだけビデレスよりはましだ。

このペッタリ感がなんか許せない。

ていうか変身状態で洋服着れたのか、いつも変身と同時に巫女服になっていたから、脱ぐとか考えたこともなかつたよ。

涼の身体が光りに包まれて、すぐに収まる。

そこには白に蒼地のラインが入った巫女服を纏つた少女が立っていた。

「おい」

涼はクレルに背を向けて黙々と作業していたのだが、その背中にクレルは声をかけた。

「なんだよ・・・」

いかにも嫌そうに顔を顰めながら振り向く。

「一言言つておく、その衣装が許されるのは城内や城外だけだ、この部屋ではさつきの出レス姿でいる。命令だ」

「はあ！？なんでだよ、意味わからんねえ」

「あえて言つなら俺の趣味だな・・・・・、断れば人質を殺す。分かつたな」

「 つ ・・・・・」

涼はしじぶしじぶ元のドレスに戻った。

それまでのピッタリとしたやつだ・・・・、泣ける。

しばらく不貞腐っていたが気持ちを切り替えたらしい涼はクレルに話しかけた。

「わつわばお・・・、私の部屋はどーだ？」

そうじやん！自分の部屋にわざ行けば何してもオッケーだよ。

とか考えての質問だつたが、そんな涼を見透かしていたかのよつてクレルは楽しそうに口角をあげて答える。

「俺と同じ部屋に決まつているだろ、もう婚姻したのだからなぜ部屋を分ける必要がある？」これからは、食事も、風呂も、寝るのも、いつも一緒だ。うれしいだらつ、俺は楽しみでしょ？がない」

クレルはにやにやと笑いながら本当に楽しそうに涼のことを見つめる。

「・・・は？」

「・・・う、うれしくねえーーー！」

何がうれしくて男と同棲生活せいやなんらんのだ！

食事、・・・は別に大丈夫だ、大したことはない。

風呂、・・・なぜ？いやいや一緒に風呂とか考えられない。

どんな風呂かは知らないけどクレルの後ろにメイドさん？侍女さんかな？が、居るといふことは、この城の風呂は前に小説で読んだことがある感じの寄つてたかつて身体を洗われるとかかもしれないなーと思ったが、そのほうがまだましだ！

実際どつちも嫌だけど、どちらか選べと言われば間違いなく侍女さんたちの視姦プレイのほうがいい。

むしろ1人で入りたい、女だからとかではなく、俺は日本人ですから、シャイで有名な日本人ですから。

最後に寝るつて、・・・寝るつて！寝るだけじゃ済まないだろ！すげえ嫌な予感がする・・・、断固拒否したい、後ろの二つは断固拒否したい。

大事なことなので2回言いました。  
じゃなくて！現実逃避したいな。

涼は真っ赤になつて首をぶんぶん振る。

無理！なんか無理！

そもそもまだ童貞の俺がなんでこれから処女を散らしそうになつてるの？

いや・・・・・、もつ考えるはやめよ。

・・・・・よし、この城を探検しよう。

大切だよね、探検。

どのくらい大切かつていうと、命と真操の危機の次くらいかな・・・。

そのくらい切羽詰まつてる感じだ。

目の前にやけ顔の男の存在を今だけでも忘れるには、すぐさま探検に行く必要がある。

「じゅっ」

シユタツと手を挙げた涼はスタスタと扉の方向に歩いていく。

「どこに行くんだ？涼」

名前で呼ぶなー！

俺が呼べって言つたんだけど、なんか嫌だ。

「散歩だよ、せ・ん・ぽ」

クレルの顔を見るとムカツくので振り向くこともなく歩き続ける。

「ンッ ヌンッ

涼が扉を開ける前に誰かによつてその扉がノックされた。

## 第7話「俺から私」（後書き）

はい、お待たせして申し訳ないです。

あいまいだった世界観をしっかりとさせていたのと、他の作家さんの作品を読んでいました。

書くよりも読むほうが好きですね。

けど書くときはスラスラと書くのでボコボコ出せると想っています。

## 第8話「王との面見」

「ノッハ ノッハ

涼は扉まであと2三歩くらいで動きを止めた。

「入れ」

クレルが扉の外の者を促すと、失礼しますと言つて金髪の騎士甲冑を着た男が入つて來た。

男は涼を敵視するような眼で一瞥すると興味をなくしたかのよつてクレルの近くまで歩いていき跪いた。

「王がお呼びです。そこの人間も一緒に連れて來いとのことです」

クレルは最初やれやれといつよつに領きかけて、あの言葉を聞き、顔を歪ませて涼のことを見る。

は？俺も？

王をまつて何を？

行きたくないからね。

と、顔に書いてあるほど、涼は如実に嫌悪を浮かべる。

クレルは難しい顔をして何か考えながら立ち上がり、扉に向かう。

「涼、着いてこい」

いやだ。

とは言えないんだよね。

「・・・分かったよ」

渋々とクレルの後に付いて扉から廊下に出た。

俺は今、廊下を歩いている。

思つたよりも小奇麗な通路を歩き、下に向かって階段を下つていく。

そして、もちろん今は巫女服に換装してある。

あんなドレスなんて着たくないからな。

クレルは巫女服に変わった俺を特に何も言わずに、さつきから黙々と歩き続けていた。

魔力が戻った俺は、さつきとは違つてしまふとクレルに着いてい

く」とができる。

……………あれ？

なんか魔力が身体に満ちてきた。

不思議に思い小走りになつてクレルの横に並び、顔を見上げる。

それに気がついたクレルは前を見据えたまま、一いちらの聞きたいことを察知して説明をしてくれる。

「涼、お前の魔力を8割ほど戻してやつただけだ」

涼は首をかしげながらクレルを見上げ続ける。

なんでだ？

わざと魔力を戻したのに、また返してくれるとか一度手間じやん。

「なんで？」

「王が何をするか分からぬからな」

「どうこう」とだよ？」

今はいつの間にか長い直線の連絡通路のような場所を歩いていた。

石というわけではない、ただ白いだけの幅4㍍高さ4㍍ほどの長方形の長い通路。

ところどころに設けられている1㍍四方の窓からは眩しいくらいの太陽の光が入り込んでくる。

一体この城はどういったつくりなのか気になるのだが、クレルの歩くのが速いのとなにか緊張しているような雰囲気のため、ゆっくりと外を見る事もできない。

ちらつと見た感じでは、眼下に城下街が見えて、その周囲を城壁が取り囲んでいた。

遠くの同じ田線の高さにこまかと同じような連絡通路が左の窓、右の窓から見える。

これ以上みてもよくわからないため、クレルとの会話に集中することにした。

「王は気分の変動が激しくてな、以前王の機嫌を損ねたやつが一瞬で灰になつた。そして、たとえ気分を損ねることが無くとも、楽しそうだからという理由で何人もの俺の部下や、城に訪問してきた客人が消されている。気休めにしかならないだろうが、何も対策を立てないよりかはマシだな」

「なるほど……ね」

なんか理屈が通じなさそうで、会いたくないんですけど……。

「けど、いいのか？俺……が……、私が王を攻撃するかもしけないぞ？」

「はっ、無理だな。王は俺ですら太刀打ちできないほど強い方だ、俺に力を抑えられている上に、俺よりも僅かに強か弱い涼が敵はずがない。対峙すれば嫌でもわかるが、けど……、そうだな、もしも涼が王を攻撃するなら俺が全力で止めるつもりだし、また、その腕輪で魔力を0まで封じてもいい、どっちにしろ無駄なことはしないほうが身のためだな」

「へ～そんな強いんだ」

「単純に魔力量だけ見ても俺や涼の3倍以上だからな」

「ふ～ん」

「……そういうえばさ」

「なんだ？」

「わ・・・私の身体を直したのとか、き・・・着替えさせたのって誰？まさかクレルじゃないだろ？な、もしそうならムツツリと呼ぶぞ」

「何だムツツリとは？まあいか・・・涼の身体を直したのは俺の部下の一人のサイールだな、あいつの治癒の能力は頭さえ無事なら

完全再生が可能というほど高い、涼の場合はなかなか大けがだつたからな、治つてすぐなら痛みを多少感じたかもしれないが今はそうでもないじゃいか?」

確かに目が覚めた時は多少痛かったけど、今はもう鈍痛すらない。

「あと、着替えさせたのは俺の部屋の侍女だ。俺は女の着るものなど着せ方が分からん」

なるほど、それはそうだ、クレルの性格では着せるなんて甲斐甲斐しい真似するわけがない。

むしろ、あのドレスとかを脱がす、というか破くほつが似合つてゐる気がする。

そんなことを考えてこるうちに、長い連絡通路は歩き終わり、城の中を歩いていた。

そして、それ以上の会話をすることなく俺はいつの間にか、巨大な扉の前にクレルと一緒に立っていた。

「入るぞ」

そう言って扉が開き、王の間に入つていく。

そこは陰気な場所だつた。来る途中の連絡通路なんかは「ここは光りの城の廊下です」と言われば信じてしまえるほどに白く、暖かだつたのに、この場所は魔王の居場所に本当にあつてゐるとしか言えないくらい、・・・・・らしかつた。

毒々しいほどに赤い絨毯を踏みしめて王の元へと歩いていく。

この王の間には正面の玉座に王と思われる人物が座つてゐる以外誰も存在していなかつた。

黒い髪に赤い瞳、赤い鎧のように見えるが、よく見ると鎧のようにな見える洋服を着こんでいるようだ、動きやすさを重視したような衣装。

ひじかけに頬杖をついてめんどくわうひこからを見下ろしてゐる。

そして何よりも驚いたのはかなりの美女だということだ、黒髪は背で見えないが腰辺りまで長いように見える。

そして、王の前に立ちクレルが跪く。

涼も一緒にぎこちなくではあるが跪いた。

「グラ二王、せいらうおう青撃軍將軍バストマ・クレル、人間界侵攻より帰還いたしました。この進軍により海上の小島のいくつかを占領、人間は

殲滅完了しました。しかし、今回使役した魔獣はおよそ全滅いたしましたが……。」

クレルの言つてこる「ことは気になるが涼はそれだけではなかつた。

何なんだいつ……。

性別にも驚いたが、なによりも王から発せられる压力が尋常ではな  
プレッシャー  
い。

今は抑えられているようだがそれでも決して近寄りたくない雰囲気  
を醸し出していた。

強いといつともあるのだろうが、それこそまして禍々しさがあふ  
れだしてこる。

美女の魅力というか、この女がかなり怖い、……存在がやばい。

俺の世界で昔にいたルイといつ王さまの嫁であるマリーさんとか、  
金髪の双子の姉が歌つ『悪の～・・・』シリーズの王女とかを実際に  
叩撃した気分だ。

速くこの場所から離れたいのが本音だ……。

と、色々と考えていたらどうやら名前を呼ばれたらしいので顔をあげて王を見る。

「お前はクレルの嫁らしいな」

「…………はい」

不本意だけどな…………。

「ふむ、人間のくせにクレルと同等の魔力とはなかなかやるのぉ…………。そうだ！人間、貴様の魔力が本当にクレルと同等かどうか確かめてみようではないか」

隣でクレルが焦つたような雰囲気を醸し出している。

そんなことには気が付かず、涼は確かめるつて何？

と、首をかしげていた。

「キスしろ」

…………え？

最近思考停止になることが多い気がする。

平穏? なにそれ?

的に、俺の頭の中は常にキサーが入っているかのよつて、ぐつしゃぐしゃだった。

「・・キ・・・ス?」

「そうじゃ、なに簡単なことだ。貴様とクレルがキスをする、同程度の魔力なら生き残る。力の差があるので貴様が弾けて死ぬ。ただそれだけのことじゃ」

「王ーしかし、まだ時期ではありません。涼を俺の魔力にこれからゆっくりと馴らしていかなければ・・・」「

「黙れ。やれといったらやるのじや、これは命令じやぞ。それともクレル、貴様は我の言うことが聞けぬと言うのか?」

クレルが反論しようとするが、ここで反論すれば気まぐれな王のことだ、クレルを殺すことだつてあり得る。

苦虫をかみつぶしたような表情で、しかし決して王には表情を見られないよう立ち上がったクレルは、すぐ後ろにいる涼に向き直り一步近づいた。

クレルがこっちを向いた。

とても嫌そう? といつては何かに耐えているような表情でこっち

に近づいてきた。

「まだ混乱中の涼はただクレルを見上げるだけで、跪いたまま微動だにできなかつた。

目の前にクレルがいる。

いつの間にしゃがんだのだらつへ。

そのまま線の位置は涼と同じ高さになつていた。

ゆつくつと。

まるでスローモーションでも見ているかのようにクレルの手が俺の頬に触れた。

そのままあ、と滑りせた手でくつと上を向かせられる。

クレルの紫色の瞳が近づいてくる。

まるで俺の身体じゃないかのように心臓が早鐘を打ち、耳にはドクンドクンドクンと心音しか聞こえない。

なんでこんなにも緊張しているのか混乱しきつた今の頭では到底解できない。

「涼・・・、死ぬなよ」

「え・・・、な・・に！？ふうぐ・・・」

何かを聞いたとした、しかしその唇は言葉を紡ぐことなくクレルの唇で塞がれる。

「・・ふ・・・んう・・、あう・・・・・んんうう・・・」

遠慮なんてしてこない本気のディープキス。

最初から舌を口内にねじ込まれて、本能的に押し出そうと舌で押し返そうとするが、クレルは巧みにその舌を絡め捕り快楽へと導いていく。

ドクンッ！！

初めてのキスに酔いしれていたのは一瞬だったのか、数秒だったのか、数分だったのか、涼には判断できなかつたが、ソレは唐突に訪れた。

クレルとキスをする。

おそらくはその瞬間だったのだろう。

クレルの魔力といつ名の熱く黒い何かが身体を駆け巡るのが分かる。

喉を通り、胃や腸といった消化器官無視してクレルの魔力は涼の下腹部に真っ直ぐに下降した。

そして、そこから身体を侵食するかのように徐々に手足へと染みわ  
たつていく。

じれつたい様な焦燥感を感じるが、そんなことを涼が考へることができるはずがないほどに身体はクレルの魔力によつて蹂躪されているため、思考できない。

その熱はただ涼の身体を満たすだけでなく、媚薬のような興奮作用を含み、強烈な熱となつて涼の思考を染め上げていった。

な・・・なに・・これ・・・・。

身体が熱い。

足に力が入らない。・・・・。

なんか  
・  
・  
・  
ふわふわ  
・  
・  
わ  
・  
・  
・  
す  
・  
・  
・  
・  
る  
・  
・  
・

そこで涼は意識を手放した。

「ほう・・・、生き残つたか。しかも、初めて受け入れたにもかかわらず身体に微細な傷もないとはの、クレル・・・ずいぶん相性のいい女を見つけたようだの」

そう言つて王は口角を上げて心底楽しそうにクレルの腕の中で寝息をたてている銀髪の少女を見つめる。

「王……、涼を休ませたいのですがよろしくでしょうか」

クレルは自身の魔力を受け入れたことで頬を赤く染めて規則正しくすう、すうと寝ている少女をしつかりと腕に抱いて退室の許可を求める。

「ああ、よござ。ゆっくりと休ませるがいい」

「ありがとうございます」

涼をお姫様だっこした状態で恭しく礼をして、クレルは自身の部屋へと戻つていった。

クレルが王間から出て行つたあと……。

ラティオスオン国王である、グラニ・ラ・フルミ王は玉座から立ち上がり、自室へと歩き出す。

「くっくっくっくっく、あの小僧と同じ魔力の娘か……、人間界殲滅よりは少しば暇がつぶせるかもしけんの~」

不吉な言葉を残して。

## 第8話「Hとの謁見」（後書き）

お待たせしました。

遅くなり申し訳ないです。

## 第9話「クレルの視点」

涼が攫われる数時間前・・・・

「クレル様、待ってください！私も行きますーぜひお供させてください」

青髪で丸顔をした子猫のような雰囲気の少女がクレルの後ろをアヒルの子のように歩いて歩いていた。

クレルはめんべくそぞろに眉をしかめながらも歩くことをやめないで話しかけた。

「断る。一応、王に進言して侵攻と偵察といつ名目で人間界に行くが、今回の目的は完全に私用だ、連れていいくことはできない。命令だ」

少女はまだ何か言いたさそうにしていて、俯いてぶつぶつといっていたがついていくこと自体をやめることはしなかった。

王都から少し離れた施設の中にクレルと少女・・・サイールは立っていた。

施設といつても外縁を城壁に囲まれたかなり巨大なとりでといつてもいい建造物だった。

その一室でクレルの前でかしづいている子供のような小柄の人物がいた、子供のような体格でもその顔はひどく歪んでおり、醜悪といつてもいいかもしねない。

「ゼル、出撃する。数は低級250に中級20程でいい、すぐ用意できるか？」

「もちろんでござります、クレル様。5分未満で用意いたします」「そうか、いつも仕事が早いな。<sup>ゲート</sup>門に先に行っているから来い」

「かしこまりました」

クレルは踵を返して施設中央の中庭に佇んでいる門に向かった。

・・・もちろん青髪の少女、サイールが付いて行つた。

「これが・・・」

「はい、そうでござります」

クレルの手には様々な色と大きさを持つ球が袋に入つて270個渡されていた。

「必要ないと存じますが、規則ですのご説明させていただきます。その球が魔物の卵のようなものになります。魔力を込めることで孵化いたします。魔物どもは魔力を与えられたものの命令を従順に従います。以上になりますが何かご質問はござりますでしょうか？」

「ないな・・・では行つてくるか」

「・・・行つてらつしゃいませ」「」「」

門の周りの護衛やサイールたちが声を合わせて送り出す。

人間界に繋がる100m程の高さの塔、その塔には場所や高さ関係なく20か所の光の穴のような、トンネルがまばゆく光っている。

クレルは浮かび上ると、そのひとつに進んでいき軽く手を挙げて後ろの声にこたえた後に光りの穴に入つて行つた。

太平洋沖の塔の中にクレルは来ていた。

「将軍！わざわざこんな場所の観点に来ていただきありがとうございました！」

「気にするな、私用だ。お前らは気にしなくていい」

塔に常駐する兵に一言声をかける。

もちろん余計な気をまわして、俺の歓迎などに集まるなど釘をさしておくことは忘れない。

しかし・・・、と何かを言おうとした兵を無視してクレルは飛び上がり一気に加速、姿が見えなくなつた。

確かにそこの大さな島だといつ報告だつたな・・・・

クレルは先日聞いた情報を思い出した。

第11ゲートから西に向かつた島国の魔法使いの話。

装束は白、髪も白、武器も白、白い色が好きなのかといふほど魔法の使い手であり、我が青焚軍せいらんぐんの幹部の1人と1200の魔物を、ほぼ1人で殲滅したらしいとの情報だった。

生き残つた部下の話によるとだが・・・・

しかも、女であるといふ。

悪い冗談だとも思つたが、人間界には確かに私にも匹敵する魔法使いがいると聞いたことがあるからそいつと戦つたのだろう。数は少ないらしいが・・・それに当たるとは運が悪かつたとしか言いようがない。

そして、興味を持ったクレルは実力を確かめるために、先ほど魔力を込めて生み出した魔物たちと共に例の島国に向かっていた。

しかし・・・

いくら見ても不思議でならない。

ビー玉程度の大きさの球に魔力を込めただけで、なんで5mを超すような魔物が生まれるのか？

一気に魔力を込めたため肉が膨れ上がるかのように増殖する魔物たち。

クレルは知らないが満員電車から人が溢れだすのを上下左右で行うとこいつ現象になるかもしない。

その肉塊に潰されないようにすぐに距離をとつて見ていたクレルは、魔物たちの体制が整つたところで移動を開始していた。

そろそろ島国の魔法使いに探知されるだろ？といつて距離・・・

クレルは自信を紫のベールで包み込み気配を完全に消して魔物たちの背後から追走する。

魔物たちは「敵と出会つたら殺せ、それまで止まるな」と命令してあるので問題はない。

そして、俺はその魔法使いと出会つた。

衝撃的だった。

その容姿もさることながら、戦い方の無駄のなさに加えた美しいと呼べるほどの戦闘技術、時折聞こえる声は耳朵を刺激して何度も頭の中を反芻する。

生まれて初めての感情だった。

欲しい・・・

あの女が欲しい・・・

俺は本気でそう思った。

この女が人間だからとか、部下を殺した魔法使いだからとか、そんなものはどうでもよかつた。

ただ純粋に、愚直に、欲望に忠実に、どんな手を使っても手に入れ

て見せる。

クレルにそう感じさせた。

しかし、いくらなんでもこの場でどちらのことは容易くはないと思った。

300近い魔物を瞬殺といつてもいい速さで殲滅したのだ。

全力を見せてはいなかつたのでわからなかつたが、俺よりも少し弱いくらいか？

ここに捕獲しようと動けば確実に戦闘になる。

勝てなくもないが長引くことは必須だろう。

ならば・・・

今の不可視の状態でばれてはいけないので。

このまま様子を見て隙を見て捕えればいい。

一人そう考へると、帰還を始めた白い女を追つて追い始めた、自身の魔力を与えた魔物の残骸を一顧だにすることなく・・・・・

その時は案外早く訪れた。

人間が白い女に何かを打ち込んだのだ、女は打ち込んできた人間を始末はしなかつたようだが拘束してなんとか意識を保とうとしている。

しかし、時間がたつほどに白い女の魔力が乱れてきた。

このままではいずれ意識を失うかもしれない、そしたら連れ去ればいい意識を失つても高位の魔法使いは自衛の魔法を使つていることが多いので、多少痛めつけるかもしれないがあとで直せばいいので問題ないだろ？

と、そこまで考えていたら突然俺の左下の眼下の空間が割れて魔物が姿を現して白い女に攻撃を始めた。

俺の連れてきた奴ではないな、見た感じ上級か特級クラスの魔物のようだどこからか逃げてきたのか怪我をしている。

まあ俺には関係ないが、白い女もよくやる・・・

あそこまで魔力が乱れていて、あんなに戦えるとはな・・・

ますます欲しくなった。

と思案していると殺されそうになっていた。

さすがに無理があつたか・・・

俺は不可視の魔法を解除。

完全に油断している魔物を一撃でミンチにした。

「「」苦労だつたな」

俺は「」まで白い女を弱らせてくれた魔物に礼を言つ、魔物自身はそんなつもりではなく殺す気だつたようだがな。

これ以上失血しないように紫のオーロラで応急措置をしてさりに固定化させる。

そして怯えながらこちらを見ている周りの人間どもを一瞥して飛び上がつた。

門<sup>ゲート</sup>への移動中に白い女が光り出して男になつた時はかなり驚いた。

なんとか女に戻す術式と、魔力封印などの術式を込めた腕輪型のオーロラを作ることに成功したときは心底ほつとした。

あの時はかなり焦つた、男のこいつは好きになれそうになかったからだ、さつきの男の姿の女のことは忘れようと思つた。

俺は女を捕まえたのだから・・・・

門<sup>ゲート</sup>を潜り城に帰還した後は医療魔法使いに女を預けて、完治したら俺の寝室に寝かせておくことを侍女に指示しておいた。

数日して・・・・

隣の寝室で寝ていた女が起きる気配を感じて寝室へと足を運んだ。

キィィィイ・・・

軋みを上げて扉が開く、最初はこんなに音はならなかつたのだがあることが原因でこんなにうるさく鳴りだした。

そして、正面を見るところちらを見つめながら困惑しつつも警戒した様子の少女の姿が目にに入った。

数日間、寝ているときには布団に隠れて見えなかつたがかなりかわいいドレスを着ていた、ドレスについても寝巻に近いものではあるのだがそれでも、白い白銀の髪に金色の瞳が実際に映えるドレスだった。

そんなことを考えながら白ずくめの少女に近づいていく。

「な・・・・なんだよ・・・」

俺が近づいていたときよりも警戒度を上げた様子だ。

「まあ、似合つてゐるじゃねえか」

感じたことを素直に口にしたのだが、女はみるみる態度が悪くなつていく。

「うわせーー俺の趣味じやねえー」

さつきと隨分態度が違つたことに驚きつつも苦笑する。

「ううううだーーそしておめえは誰だーー」

こんな小柄の少女に怒鳴られたといひでなんとも思わない。

クレルは肩をすくめる。

まあ俺が攫つてきて言つのもアレだが、説明してやるか・・・・

注意も含めて。

「ここは魔界だ、お前らの住んでいる人間界とは次元の違う世界だ。そしてここは、王都ラディスオン帝国の城にある俺の私室だ。あと、「おめえ」ではなく、バストマ・クレルという名がある、クレルと呼べ」

「ここがどこかは分かった。で、なんで俺はここにいるんだ!」

「俺がさらつてきた。人間界になかなか強い面白い女がいると聞いていたのでな、観察しに行つたわけだ。そしたら、あの程度の雑魚魔物に殺されかけていたからな、助けて連れてきたつてわけだ」

助けたことにはすれば恩も売れるし、言うことを聞きやすくなるだろう。

「……ありがとう。……一命の恩人だから禮だけは言つておく、もう帰つていいか?」

帰すわけがない、お前はもう俺のものだ。

そして宣言する。

「それは無理だな、お前はこの俺の嫁になるのだから

呆けた顔で俺の顔を凝視したままつぶりと一〇秒は経つただろうか？

そこでやつと反応があつた。

「は？」

短いものだつたが・・・

「聞こえなかつたのか？嫁になれと言つたのだ」

明らかに女は混乱した様子で・・・

「無理ー。」

「拒否権はない。命令だ」

「いや無理だから。意味分からないからー。」

断るとは思つてはいたがやはりか・・・

説明するのもめんどくさいが仕方がない、俺の嫁のためだ頑張るか・  
・・・

そして、魔族の嫁事情の説明をして腕に付けたリングの説明もしてやる。

はつきり言って面倒くさかつたが、女の反応が面白くて嫌ではなかった、むしろ話している途中で女は睨んでいるつもりだつたらしいが、俺からしたら上目づかいで見つめているだけのような状況があり、激しく動搖したりもしたがなんとか目をそらすことで、その動搖は隠せただろうと思つ。

そして一通り説明して最後通告してやる。

「分かつたら嫁になれ。これはもう決定事項だ

だが女は俺を無視して腕輪をはずそうとしている。

俺のオーロラ型の腕輪は空氣のよつたものなので外すことはできないのだがな・・・・

いつまでやつているのか・・・・

これは、あの手を使わないと納得しなさそうだな、自分から俺のモノになつてほしかつたがいきなりはさすがに無理があるか・・・・

クレルは溜息を吐いて手招きをする。

「とりあえず」ひちに来い

「断るー近づくなー」

「つたぐ・・・」

頑なな奴だ。

一瞬で女の後ろに回り込み肩に抱きあげた。

悲鳴を上げながら何かしら喚いているが無視して部屋の外へと出た。

「はーなーせーよー!」

肩に抱いた状態で暴れられるとバランスが崩れて不規則な歩き方になる。

いいかげん煩わしくなってきたので黙らせる」とこじょつ。

「ひみせえー

パンツ！

思いつきり尻を叩いた、多少手加減はしたがドレスの上からなのになかなか小気味のいい音がした。

「ひやあつ！」

思つたよりもかわいい反応をする・・・

もう一度聞いてみたいな

「はっはっはっは、かわいい声で鳴くじやねか」

「そう言ひながら何度もたたいていふと「も・・・もう・あはれつ！  
なにつ・から・・・」と泣き声で泣つてゐるので呟くのをやめる。

もつと聞きたかつたんだがな・・・・

その思いながら、最後に針をさしておへりとなれないとせ忘れない。

「最初からおとなしくしていればいいんだ」

そつとひで千からびた昆布のよつになつてゐる女を抱いだまま地下の牢屋を田指した。

牢屋の通路でどうでもいい会話をしながら人間が収監してある牢へと近づく。

そこには以前、部下が攫つてきた人間が20人ほど押し込められていた。

まったく、あいつが何を考えているのかは分からぬが今は都合がいい、使わせてもらひつとするか・・・

「なんで、人間がいるんだ? これも嫁とかにするつもりか?」

「これは、お前のために用意した人質だ。俺の嫁にならなければこいつらを一人づつ殺す。わかつたか?」

俺は満面の笑みで女を見つめ返す、絶対に逃がさないという思いを込めて。

「そんなの卑怯だ! それに俺は男だつて言つただろ!」

「 さうか・・・、残念だ」

殺す気はない、ただ殺意は本物のモノを醸し出しながら、いつもながら一瞬で発動できる魔法を、時間をかけて練つていく。

それはまるで死へのカウントダウンのようだ。・・・

女は今にも泣きそうな顔して絞り出すよつて叫ぶ。

「 分かった！なるよ！なる、お前の嫁になるからその手を下せよ、・・・な」

「 そうか、それは良かつた」

もつとその顔見ていたかったが、この暗い場所ではよく見えない、嫁になるという言質は取つたのだ・・・、時間はいくらでもある。これから様々な顔を拝ませてもらおう、この俺の手で・・・

クレルはニヤニヤとしながら元来た道を戻り出した。

後ろに涼を連れて。

一生懸命に俺の歩幅にひいてくる女が何か言つてきているが、それ  
よつも気になつてゐることがあった。

「おい・・・」

呼びかけて立ち止まると、後ろから走ってきた女が俺にぶつかった。

「うわっと・・・、なんだよ！」

そういういながら俺の腹をなでて いる、 いつたい何をしたいのかが分  
からない。

「何をしていいの・・・いや、どうでもいい・・・貴様はこれから『俺』と言つてことを禁ずる。なんか気に入らん!あと俺のことはクレルと呼べと言つたはずだ」

「お前のことをクレルと呼ぶのは別に問題ない・・・。だけど、俺と言つのを否定されるは嫌だ。俺はあくまで男だ！」

「前に言つたはずだ、貴様に拒否権は無いと、『俺』ではなく『私』と言え、さもなくば人質を殺す。わかつたな」

これでいい。

女なのに男のような口調がどうもしつこくなかったのだが、これだけ脅しておけば大丈夫だらう。

そつ言つてクレルは歩きだした。

と・・・、後ろでぶつぶつとこつ声が聞こえた。

「何か言つたか？」

そつ言つてじぶんせじぶんになりながらも女がなんとか取り繕つとじている、絶対に何かを隠しているだらう・・・・・

「え・・・あ・・・、その・・・、あれだ・・・・・、そう・・・名前！俺のな・・・じやなくて、あつと・・・、わ・・・、わた・・・、わたしの名前は涼だ！貴様じやない！おま・・・、クレルも、お・・・、わたしのことは涼つて呼べ」

そのほほを上気させながら話している姿を見て、勝手に手が女・・・いや、涼の頭の上に置かれた、が・・・、ただ撫でるはつまらないので思いつきつ押し込むようじべじべじべつと撫でつける。

「それもせうだな、これからせま前で呼ぶとじよつ・・・涼」

「いいかげんにやめやー。」

いつまでも続けていたかったが手を払われた、わざやかだが俺の希望は叶つた、女の名前を知ることもできた。

クレルは上機嫌で再び歩き出したのだった。

部屋に戻つてからの女・・・涼はさつきまで不機嫌だつたとは思えないほどに楽しそうに部屋を物色している。

こんな平凡な部屋の何が面白いのか・・・

だけど、なるほど・・・こんな一面もあるのか。

そんなことを考えながら、クレルの部屋付きの侍女であるリレイに紅茶を入れてもらつて椅子に座つてゆっくりと飲む。

紅茶を受け取るときリレイがニヤニヤしていたのが気になつたが、あえて無視しよう、こつは絶対に碌なこと考えていない。

のんびりとしていると涼が近づいてくる。

「……これ、はずせ」

ある程度予想していたことではある。

こんな敵地のど真ん中で無防備な状態など不安なのだけれど。

もともと魔力はある程度戻してやるつもりだったので吝<sup>あはり</sup>かではないがな。

そして、こりこりと駄々をこねた（魔力量・ドレスの件・寝室など）が全て納得させたら、あきらかに不機嫌だという態度で出て行こうとする。

「どこに行くんだ？涼」

「散歩だよ、そ・ん・ぽ」

全く・・・、じょじょくは俺と一緒にしか行動はやめのつはないのだがな・・・

後で言つておくが、誰か来たようだしな。

「ンンンンンン

涼が扉を開ける前に誰かによってその扉がノックされた。

「入れ」

金髪の騎士甲冑を着た男が入って来た、こいつは王の近衛だ。

とこいつとは今回の報告だわい・・・

「王がお呼びです。そこの人間も一緒に連れて来いとのことです」

最悪だ・・・・

いつかはばれると思つたが早すぎる。

王のことだ、何をするかが全く予想ができない・・・・

だが、行くしかないか・・・・・

「涼、着いてこい」

セーフィーは「……分かったよ」と言しながら、明らかに泣々と着いてきた。

王の間の扉の前。

涼に魔力を全て戻してやつて、どうでもいい雑談をしていろつたり着いてしまった。

気合を入れなければならぬ。

せめて、王が涼を殺すことがないようにならなければ……

「入るぞ」

そう決意しながらクレルは王の間へと踏み込んだ。

今の状況は運が良かつたのか、悪かつたのか……

ある意味ではよかつたかもしだい。

涼が王の機嫌を損ねるということがなかつたため殺されることがなかつたからだ。

しかし、これから死ぬかもしれない・・・

この俺の手によつて。

魔族のキスは命懸けだ、種を残すという行為である性交渉よりかは生存率が高いが、それでも女の魔族は多くのリスクを背負つてゐる。涼は人間だが体の構造は魔族とほぼ変わらないことから、おそらく我々魔族と同じような現象が起つたことが推測できる。

つまり、女の魔族はより高位の男の魔族よりも一定以上力が下の場合は死ぬ。

少しずつ慣らすつもりだつた・・・

人間が相手でもあるし、涼は俺よりも若干だが魔力量などが下回る。耐えられる程度の誤差ではあつたが不安要素が多すぎるので、ようやく手に入れた俺の伴侶となれる女を死なせたくはなかつた。

だが、無理かもしれない。

涼が耐えられることを祈るのみだ。

俺は・・・涼とキスをしなければならない、王の命令で・・・  
半端なことをすれば王が機嫌を損ねることは今までの経験上嫌とい  
うほど熟知している。

王が満足するまでキスを続ける。

それまで死なないことを祈るのみだった。

俯いている涼に近づく。

俺の葛藤は一瞬。

王の命令ならば聞かなければならぬ、意見は許されてはいるが拒  
否しようものなら將軍職にいる俺でも殺されるからだ、結局自分が  
大事というわけだな・・・・

目がかすかに潤んで、不安と恐怖の入り混じった表情の涼の顎を持  
ちあげる。

「涼・・・・死ぬなよ」

俺は声をかけた瞬間に我に返ったかのよつて困惑の表情を浮かべる  
涼の瑞々しい唇を奪つた。

「え・・・、な・・に・!・?ふうぐ・・・」

刹那の抵抗も許さず右手で顎を押さえて、左手で腰を引き寄せせる。

始めは驚きからか抵抗らしき動きをしていたが、舌を口内にねじ込み躊躇するかのように涼の舌を絡め捕り、味わっていく。

「・・ふ・・・んう・・、あう・・・・・んんうう・・」

唇を奪つた瞬間から俺の魔力が涼に流れしていくのを感じる、時間にしたら1分にも満たなかつたであろう時間。

その間に俺の魔力が涼の体を駆け巡り侵していくのがわかつた。

そして・・・・、涼は死ぬことなく、俺のうでの中で頬を上氣させて荒い呼吸を繰り返しながらも気絶していた。

生きていた！

死ななかつたという喜びもあつたが、それにも増して俺との相性の良さに歓喜さえ覚える。

今、腕の中で寝ている少女が愛おしい。

「まつ・・・、生き残ったか。しかも、初めて受け入れたにもかかわらず身体に微細な傷もないとはの、クレル・・・ずいぶん相性のいい女を見つけたようだの」

そう言つて王は口角を上げて心底楽しそうにクレルの腕の中で寝息をたててゐる銀髪の少女を見つめる。

「王・・・、涼を休ませたいのですがよろしいでしょうか」

クレルは自身の魔力を受け入れたことで、今は規則正しくすうすうと寝てゐる少女をしつかりと腕に抱いて退室の許可を求める。

「ああ、よござ。ゆっくりと休ませるがいい

「ありがとうございます」

涼をお姫様だつこした状態で恭しく礼をして、クレルは自身の部屋へと戻つていった。

クレルの寝室。

ベッドに寝かした涼を見ながらクレルは笑みを浮かべる、それは実際に楽しそうに・・・・

「これからが楽しみだな・・・・、涼」

その言葉を涼が聞けば反論の一つでもしただらうが、寝ている状態の涼にそのセリフが聞こえるはずもなく。

田は既に地平線に沈む時間だった。

## 第9話「クレルの視点」（後書き）

お待たせいたしました。

別に書きたくなかったというわけではないのですが、いろいろあります・・・

年末年始、インフルエンザ、定期テスト、とどめにパソコンが諸事情により壊れて使えなくなるなど、まあそんなことがあって書く気が減退していました。

これからの中身は大体1カ月おきくらいになりそうな感じです。

ご理解のほどよろしくお願ひします。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0814p/>

---

おれが魔族の嫁に！？

2011年7月24日14時12分発行